

胡麻油
菜種油

胡桃油

伽羅油

〔近世女風俗考〕髪の油の事

儉約問答安永元年八十二歳、上其流、老人筆記曰、略古は唐苧として、細き苧繩にて髪を結ふ、能人の女子は胡麻白絞等の油にて髪を結、下々の女子は、菜種の油にて髪を結ふ、

〔女重寶記〕女け玄やうの巻

一髪の油は、くるみの油を御つけ候べし、色くろく、玄なよく、にほひ高からずしてよし、そのほかの油玄なく、あれども、いづれもよろしからず、匂ひあしき油を付たる女は、おとりせらるゝもの也、

〔女鏡秘傳書上之、下〕かみにあぶらをつくる事

あぶらをつくるに、つねのごまの油をつけ侍れば、殿によりてきらひ給ふものなり、くるみのあぶらをとりにてつけ給ふべし、だいにくろくなり、にほひせぬものなり、

〔貞丈雜記八調度〕一きやらの油、すき油、びん付などと云物古はなし、古は水油を付て髪をすきて、ふのりを付て髪をゆひしと也、

〔近世女風俗考〕髪の油の事

伽羅の油といふは、透油の本にて、今の髪付油は、透油の變せし物也、たゞし百三十年前、髪附油といへるは伽羅の油の事なり、

〔近世女風俗考〕髪の事

寶永の始元祿の末より、吹鬢と云名、諸書にみへたり、註また此頃より伽羅の油を多く塗りて光澤を出せし故、縹子鬢といへる名も多く見へたり、

髪の油の事

新智惠の海享保甲辰印本 匂伽羅の油の秘法、唐蠟八兩、松脂三兩、甘菘二兩、丁子七分、白檀一兩、茴香四分、肉桂三兩